

はんぶんこ

福井県立藤島高等学校 吉村 悠里

落ち葉が舞う帰り道。吐く息は白く、部活で温まったはずの体はあつという間に冷え、ついポケットに手をつっこみたくなるが、わたしにとってはこちらと特別で、楽しみな雪待月が今年もやってきたと思うと、ペダルをふむ足にも力が入る。

わたしのすきなもの。それはバブ、いわゆる発砲入浴剤だ。ゆっくりと広がっていく色とあのしゅわしゅわの泡がたまらない。とけているときにお湯から出すと、泡をぶくぶくしながらシューっと音をたてる。まるで「お湯から出さないでよ！」と文句を言っているかのようで、こちらも「はいはい、わかっただよ」などと言いながら会話を楽しみつつ、何度も出し入れしてしまう。ほんとうはバブをとかし切ってから入るべきなのだが、どうしてもとけているさまを楽しみたいのだ。ふだんは粉末タイプの入浴剤だからこそ、寒い日に不定期で登場するバブの日は、お風呂が沸く瞬間を今か今かと待ち構えて、いちばんにバブを投入する。しかし、それはわたしだけでは無い。小さい頃、一緒にお風呂に入っていたから知っている。兄もバブがすきなのだ。

その日はとても寒く、そしてバブの日だったのに、本を読みふけているうちに兄に一番風呂を取られてしまった。しまった、先を越された。バブとの会話はさぞかし楽しいことでしょう、とちよつとすねながら、兄が出てくるのを待っていた。どうせわたしが入る頃にはもうしゅわつもしないでしょう、とも。

どのくらいだっただろうか。「どーぞー」と兄の声。待ちくたびれてとぼとぼとお風呂に向かうと、ぼつんと置かれたバブの袋。「またゴミを置きっぱなし……。」と袋をつまみあげてはっとした。半分に割られたバブが入っている。心をおどらせながら、兄が残してくれたバブをゆっくり入れた。兄の長湯後の二番風呂は少し冷めていて、バブも早くにとけ切ってもわたしを包み込むしゅわしゅわがいつもより温かく感じて、つい長湯してしまった。

「ありがとう。割るの大変やったやろ。」

「いや、これくらい簡単やし。すぐ割れるわ。」と兄。いやいや、わたしも割ろうとしたけれど、びくともしなかった。そんな硬いバブをわたしのために必死に割り、そつと半分残しておいてくれていたやさしさに、じんわりと胸があたたかくなった。小さなことかもしれないが、さりげなく「はんぶんこ」してくれる兄が、わたしはだいすきだ。

そういえば、兄は昔からよくいろいろなものを「はんぶんこ」してくれた。何かを選ぶときは、いつも先に選ばせてくれるし、優柔不断で決めかねていると、どちらも「はんぶんこ」して分けてくれる。そんなとき、分けてもらったわたしはもちろんニッコリだけれど、兄の顔にも笑みがこぼれている。だからわたしも兄のまねをして「はんぶんこ」するようになった。自分だけの幸せより、みんなが幸せな方が、わたしにとってはもつと幸せだということに気づいたからだ。そして、たとえケンカをしても、自然と仲直りできるのは、はんぶんこの魔法のおかげでもあるに違いないと、ひそかに思っている。

わたしも高校生になり、昼休みに友達とお菓子を分け合いながらおしゃべりを楽しんで  
いる。「はんぶんこ」はモノの幸せだけでなく、コミュニケーションをとるきっかけをくれ  
る。そしてやさしさであふれる空間を広げてくれる。昼休みのひとときがわたしにとって楽  
しくて、癒しの時間だと思えるのも、兄が教えてくれたはんぶんこの魔法のおかげである。  
だからこれからは、バブやお菓子だけでなく、いろいろなかたちで、兄のようにさりげなく  
カッコよく、みんなと幸せを分け合えるようになりたい。そしていつか、やさしさであふれ  
る空間が世界中に広がっていくことが、わたしの大きな幸せである。

まだ冬は始まったばかりだ。これからどんどん気温が下がり、雪ふりつもる日がやってく  
るだろう。帰り道はもっと寒くなるが、わたしは大丈夫。温かく、やさしい家族と、ほかほ  
かのお風呂が「おかえりなさい」と迎えてくれるから。そして一番風呂を競う必要もない。  
むしろ二番風呂の方が、わたしにとっては特別な「はんぶんこ」のバブに出会えるから。で  
も、あの硬いバブを、母に割ってもらって一番風呂に入るのではなく、いつか自分の力で割  
れるようになったら、兄に残りのバブをさりげなく、でもちょっぴり自慢げに渡してみたい。